

## 職場は最前線基地だった

地域福祉課長 今村俊夫

同じ西神ニュータウン（神戸市西区）に住む森田・茶屋道両係長と連絡を取り合い、互いの無事を確認した後、森田係長の運転で職場に向かう。車のラジオは阪神高速が倒壊し、1人の死者が出たとの情報を伝えていた。が、それ以外に市の中心部がどのような状態かは全く不明である。いつもなら、市街地に向かう車で混み合う時間帯だが他に車はほとんど見かけない。途中、長田方面の上空が異様に黒く不気味であったが、それが火災による煙だったことは、後でわかったことである。

山麓バイパス布引トンネルを抜け出たとたん目に飛び込んできた光景には、一瞬我が目を疑った。道路はいたるところ大きな亀裂が走り、信号機は消えたままだ。木造家屋のほとんどが倒壊し、普段見慣れたビルが今にも倒れんばかりに大きく傾いている。まるで映画のワンシーンを見ているかのような錯覚に陥った。そして我々3人は、今回の地震が、一瞬のうちに大都市を崩壊させたすさまじい規模のものであったことを思い知らされた。

午前9時20分、区役所に到着。庁舎はなんとか無事だったが、2階以上の各階はほとんどの書架、ロッカーが転倒し、机も麻雀パイをかきまぜたかの様で足の踏場もない。壁面もいたるところに亀裂が走り、コンクリートの塊が散乱している。もし、勤務中に震災が発生していたら、職員にも相当な犠牲者が出ていたに違いない。

この時刻に区役所にたどりついた職員はまだ僅かであり、停電したままの薄暗い事務室で皆、なかば放心状態の様子であった。

ともかく、午前10時に来ている職員全員を取り合えず1階の福祉事務所に集まるよう指示する。区庁舎には保健所、福祉事務所を合わせて約400人が勤務しているが、その時点で集まった職員は30数人、約1割程度であった。我々のように被害の少なかった西北神から車で来た者がほとんどで、他の職員は自宅から徒歩で区役所に向かわざるを得なかった。

今回の震災のような大災害時、即ち、すべての交通機関が麻痺状態で、しかも中央区のようにほとんどの職員が職場から遠隔地に居住し、加えて職員も少なからず被害を受けた状況の中で初動体制のための職員をいかに召集し、確保していくかは今後解決すべきかつ困難な課題である。そして、それは神戸のみならず、大都市共通の課題であろう。

さて、1階に区対策本部を設置することを決定、今後の情報連絡に備えて関係機関の電話番号表を作成し、壁面に掲出する。まちづくり推進課の池上君に区内の被害状況を撮影するよう指示をした。しかし、正直なところ、一体何から手をつければよいか、わからなかった。

誰もが予想しえなかった未曾有の大震災が発生したのだ。地域防災計画は職務分担上のガイドラインにはなっても、今回のマニュアルとしては全く役に立たない。さらに、本庁（市役所）からの指示も、状況からして到底期待しえない。すべてはここにいる限られた職員で判断し、行動せねばならない。これからどのように推移していくのか不安とともに、身の引き締まる思いであ

った。

・どんどん膨れあがる避難者数

区の対策本部として、まず急がれたのは避難所の開設と避難者数の把握であり、そのため職員が手分けをして学校等の指定避難所に走った。ある学校ではすでに避難者があふれ、止むなく近くの高校や公共施設等に受け入れを要請し、誘導した。また公園にも住民が自主的に避難しテントを張っているとの情報があり、改めて区内の主要な公園を巡回した。こうして、午後2時過ぎには、避難箇所数30、避難者数6千人という状況を把握し、本庁に第一報を送った。ただ、この数字はあくまでその時点での”瞬間的状況”でしかない。実際には、すべてのライフラインが停止し、また余震の不安に駆られた住民が、どんどん避難所に押し寄せており、後でわかったことだが、わずか数時間にはほぼ2倍に膨れ上がっていた。さらに、深夜(18日午前0時)には2万人に達するという状況であった。

一方本庁では、市内の給食業者がほぼ壊滅状態であったため、姫路、加古川、加西、といった市外の業者に発注確保の必死の努力が続けられていた。その結果、17日午後4時頃4、400個のおにぎりが区に届けられた。しかし、その時点では避難者数6千人という数字を基に各避難所に配分、搬送を行ったため、一部の避難所では大混乱が生じることとなった。幸いにもその後、パン、弁当、乾パン、毛布などの救援物資が深夜にかけて到着し、最低限の食料と毛布を運び込むことができた。

職員はほとんど不眠不休で、限られた車両をフル稼働し、荷降ろし荷積み、搬送作業にあたった。こうして震災1日目の夜は、避難所への物資の搬送にその精力のほとんど

が割かれた。そして、翌日以降給食業者による供給体制が整う2月1日まで区の主要な業務となった。すでに19日の時点で区内の避難所は96カ所、3万9千人に達していた。



救援物資(1/19)

ところで、全国から送り込まれる食料、水、衣料品等の救援物資は貴重な避難所の生命線であり、おかげで多くの避難住民が飢えと寒さをしのぐことができた。しかし、続々とトラックで運び込まれる物資の荷降ろし作業は、厳冬の深夜に及び、連日の搬送作業で疲労困ぱいの職員にとって大きな負担となった。通りがかりの人も、また次々に駆けつけてくれたボランティアも、これら物資の運搬に大きな力を発揮していただいたが、それにしても、震災当日から出勤している職員の疲労はピークに達していた。

この危機的状況は、区長が自衛隊に協力を要請し、隊員の方々が徹夜で荷降ろし作業を引き受けていただくことにより脱することができた。深夜、救援物資を満載したトラックが到着するたびに、若い隊員が一斉に飛び出し、みるみる間に、荷台の物資を降ろしていく、そのきびきびした作業は、実に頼もしく、かつ有り難かった。この自衛隊の荷降ろし作業は、深夜だけでなく、後に24時間体制に拡大されたが、これによって単

に職員の負担が軽減されたばかりでなく、避難所への搬送についての組織的な分担体制、さらに区職員の勤務体制のローテーションを確立することが可能となり、区災害対策本部にとって大きな節目となった。

区にはこうした避難所への物資搬送以外に、区民と直に接する現場の最前線基地として、実に様々な要望が持ち込まれ、その対応に追われた。もちろんそのすべてに応えることはできなかつたし、今もってこうしておけば良かったと悔やまれる点も少なくない。しかし、初期の混乱した状況下において、区の職員は精一杯のことをやったというのが実感である。そして、言うまでもなく、その陰には区職員以外の多くの人々の善意と協力という支えがあった。

中央区では、震災当初、他局からの応援職員が得られず、小学校等の避難所は4月に全国の自治体の応援職員の派遣があるまで、職員を常駐させることが出来なかつた。にもかかわらず、大きな混乱もなく避難所が運営できたことは特筆すべき事柄である。これには、校長をはじめ現場の教職員、また、ボランティアの活躍に負うところが大きかったが、なによりも避難住民による自治組織が早くから出来あがり、そのリーダーに人材を得たことが大いに幸いした。

2月に入ってから、避難所の物資等の対応のほか、り災証明の発行、義援金の交付、り災証明に関する再調査、倒壊家屋の撤去及び申請受付等、本庁からは次々と震災直後の混乱期から本格的な復旧業務へ、いわば第2段階へと移行した時期である。区的全職員は、文字通り総動員体制で業務に

あたった。

これらはいずれも、被災者の直接的な被害が伴うものだけに、時には窓口等で大きな混乱も生じた。現場の第一線の職員はもとより、責任者である担当課長の心労も並大抵ではなかつた。が、これらの業務も東京都をはじめ全国の自治体の職員の方々の応援により、切り抜けることが出来た。特に長期間神戸に滞在し、市の職員以上の熱意をもって対応していただいた方々には、本当に頭の下がる思いであった。改めてお礼を申しあげたい。

以上、区の職員の立場から、主として震災直後の対応を中心に綴ってみた。この8か月を振り返って、やはり今後にかすべき教訓・課題は多い。

中でも、避難所の運営をはじめ様々な震災関連業務の遂行にあたって、区と各局との応援・連携のあり方、また、全国から送られてきた救援物資をめぐる受け入れ、配布等については多くの教訓を残したことを指摘しておきたい。

特に、震災直後、怒濤のように寄せられた救援物資は、専門の物流ノウハウを持たない行政にとって少なからず混乱に拍車をかけた面もあったように思われる。今後、大震災はどの自治体においても起こり得るものという前提に立ち、教訓をノウハウとして整理し、後世に伝えていくことが、我々の課題であるといえる。

これらの検証は他日を期すこととし、取り合えず神戸からの報告とさせていただきます。

※本文は東京都職員研修所刊の「研修とうきょう'95・秋・第42号」に寄稿したレポートを 再掲・一部加筆したものです。